

# 栄養教育実習の経験による学生の意識調査

乾 陽子<sup>1</sup>， 福永 峰子<sup>1</sup>， 久保 さつき<sup>2</sup>

## 要旨

本学では、平成 17 年度から栄養教諭の養成を行っている。栄養教諭は兼務校を多く持ち、本学のある S 市の栄養教諭は 1 人当たり 3~4 校を担当していることが報告されており、児童・生徒と向き合う時間がとれないこと、授業数を増やすことができないことなどの課題がある。

今回、栄養教育実習後の学生のレポートから読み取れる学生の意識について把握し、栄養教育実習を有意義なものにし、栄養教育実習前後の指導に活かすために調査を行い検討した。その結果、学生自らが作成した教材の質や量、工夫については意識が高いが、その指導に適した教材を考えなければならないという意見は 1/3 にとどまった。また黒板の使い方についても不安に感じている学生が多いことがわかった。これを踏まえ、学生が児童の実態を把握できる機会を提供し、栄養教育実習の事前指導では一つのテーマについてパターンを変えた授業内容を考えたり教材研究を幅広く行うなど準備をしっかりとさせたい。また、事前の実習校との打ち合わせを充実させ、実習内容については栄養教諭の職務の実際に触れる機会を多く設定してもらうように依頼していきたい。学生が学校における食に関する指導を学校給食と一体のものとして展開する意義を理解できるような実習にしてほしいと願う。

## キーワード

栄養教諭， 栄養教育実習， 学生の意識， 食に関する指導， 教材

## 1. 序文

平成 17 年に「食育基本法」が施行され、国民運動として食育の推進が提唱されるようになった。学校現場においても、児童および生徒が健全な心と身体で生き生きと暮らすことができ、豊かな人間性を育むとともに生きる力を身につけていくために「食」が重要であるとされ、平成 17 年度から栄養教諭制度が施行され、教育的資質と栄養に関する専門性を兼ね備えた「栄養教諭」が小・中学校に配置されるようになった<sup>1)</sup>。

栄養教諭は、「食に関する指導」の推進に中核的な役割を担い、給食を「生きた教材」として食育に取り組むとされている。

<sup>1</sup> 生活コミュニケーション学科食物栄養学専攻

<sup>2</sup> こども教育学部こども教育学科

児童および生徒が毎日を健康で生き生きと生活していけるよう、正しい知識に基づき自ら判断でき、規則正しい生活習慣を送れるよう自己管理能力を身につけさせることが必要である<sup>2)</sup>。

栄養教諭の職務内容は学校教育法で、「児童の栄養の指導及び管理をつかさどること」と規定されている<sup>1)</sup>。また、文部科学省「食に関する指導体制の整備について」では、教育に関する資質と栄養の専門性を生かした、「食に関する指導」と給食運営上に必要な「学校給食管理」を一体的に担い、食の指導と給食の管理を展開することであり<sup>3)</sup>、「食に関する指導の充実と栄養教諭に期待される役割」では、①児童生徒への個別的な相談指導のほか、給食の時間や学級行事、学校行事、児童会（生徒会）活動など学級担任の作成する指導計画に基づいて栄養教諭が指導の一部を単独で実施することが可能、②家庭科や保健体育科等の教科においては、学級担任や教科担任の教諭との連携強化の下で、食に関する指導を実施することが可能、③食に関する指導の充実のため、栄養教諭は他の教職員や家庭・地域との連携・調整を行うなどの役割を期待、としている<sup>3)</sup>。これらのことから、栄養教諭が学校教育の場で、担任や養護教諭など他職種の教職員、家庭、地域などのコーディネーター的役割として「食に関する指導」を担うことへの期待が大きいことがうかがえる。

平成17年の栄養教諭創設以来、食育の推進や栄養教諭の役割、栄養教諭の職務の実態などを中心とした研究報告が数多く見られる。栄養教諭養成に携わる研究者においては、これらの研究以外にも栄養教諭養成カリキュラムに関することや栄養教育実習に関すること、多職種連携に関する研究などが行われ、現状と課題が報告されている。嶋田は、子どもたちに健全な食生活を営むための基礎的な力を身につけさせることができる食育システムのモデルを考案し、学校における食育推進の政策提言をすることを目的とした、食育システムの構築に関する研究を行い、栄養教諭を中心とした学校における食育システムのモデルを提案している<sup>4)</sup>。有吉は、栄養教諭養成教育について、私立短期大学の取り組みの事例を中心にどのように取り組んでいくのかを検討・考察し、今後の研究課題として、短大の特性を生かした実践能力の向上と卒業後の進路について、を掲げている<sup>5)</sup>。長幡らは、栄養教諭免許保持者の特徴と栄養教育実習の受け入れに関する課題について、栄養教諭免許非保持者と比較し、免許保持者の方が栄養教育実習の受け入れに対し積極的であることを示唆している<sup>6)</sup>。水津らは、養護教諭・栄養教諭養成教育における多職種連携を主眼とした演習プログラムの開発に関する研究で、学生の意見で演習が参考になった点として「専門性や役割の理解」、「連携・協働のイメージ、重要性の実感」が大半を占めたと報告している<sup>7)</sup>。本研究では、本学の栄養教諭養成の実態を踏まえ、実習生の意識調査から栄養教育実習前の準備等で役に立ったこと、栄養教育実習中の経験から事前に身につけておくことよい知識や技能など課題を見出し、今後栄養教諭養成機関として、また栄養教諭養成担当教員としてより効果的な取り組みを検討していく。

## 2. 栄養教諭の課題

平成 28 年度に本学学生が卒業論文作成にあたり、S 市教育委員会の協力により、市内校に配置されている栄養教諭に現状と今後の課題について自記入による調査を実施した。その結果、多くの栄養教諭が「栄養教諭の配置数が少ない」、「担当校が複数あり本校での職務の時間が足りない」、「担当校が多いため、児童・生徒数も多く学校や児童・生徒が把握しにくい」など配置に関する問題が多くみられた<sup>8)</sup>。栄養教諭の配置については、平成 17 年 4 月より開始された栄養教諭制度により、平成 17 年に北海道、福井県、大阪府、高知県の 4 都道府県で配置が開始され、翌年の平成 18 年には 25 都道府県に 359 名、平成 19 年度では 986 名が配置されている<sup>9)</sup>。

栄養教諭制度が施行から 12 年が経ち、平成 28 年度現在全国に配置されている栄養教諭は 5,765 名(文部科学省「学校基本調査」より)となっている。S 市のある三重県の栄養教諭配置推移を図 1 に示した。平成 28 年度の配置数は 126 名であり、そのうち S 市の栄養教諭は 11 名である。今回、卒業論文で実施された S 市の調査で、栄養教諭 1 人当たりの担当校数は約 7 割が 3 校、約 3 割が 4 校を担当していることが報告されており、課題として、「なかなか児童・生徒と向き合う時間がとれない」、「授業数もなかなか増やすことができない」などの問題<sup>8)</sup>が提起されている。

平成 17 年に配置された 4 都道府県における、栄養教諭の職務の実態についての調査「栄養教諭の職務実態に関する考察－福井県、京都市、札幌市、南国市の実態調査を通して－」では、栄養教諭の職務内容に食に関する指導が加わったことで高度化し膨大な作業量となっており、そのためには配置の拡充が望まれるとしている。一方、栄養教諭自身の専門性に加え、豊かな発想や機転が求められ、より多くの経験がなければコーディネーターとして学校と家庭、地域の要となって表舞台に立てないということが明らかになった<sup>10)</sup>、とも報告しており、栄養教諭配置の拡充には栄養教諭自身のさらなる資質向上が必要であることがうかがえる。

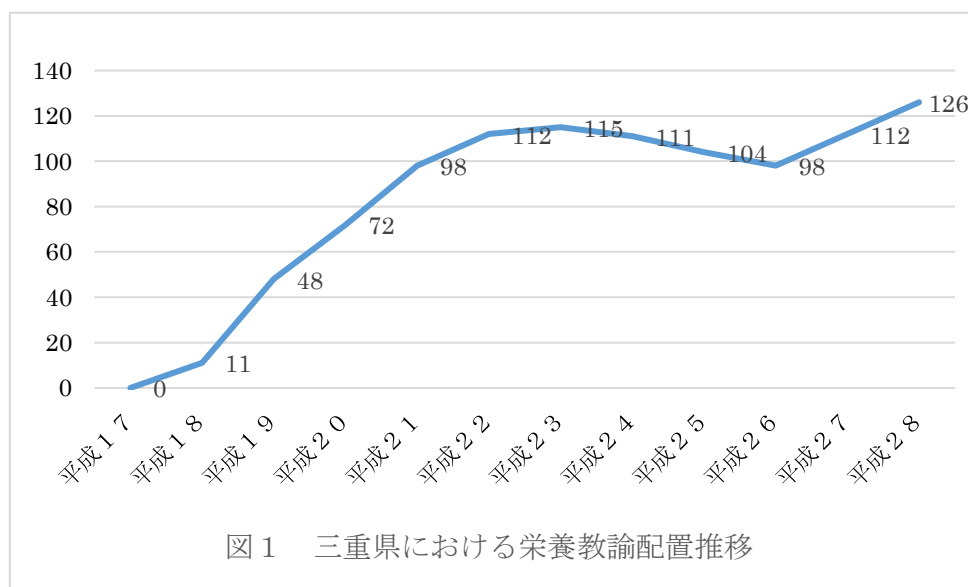


図 1 三重県における栄養教諭配置推移

また、「担任や養護教諭など多職種との連携が必要」との意見もあり、学校全体の協力体制が必要であることが伺える。このような現状の中、平成29年5月に文部科学省は、「栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育」<sup>11)</sup>を示した。これは、“～チーム学校で取り組む食育推進のPDCA～”とし、栄養教諭の配置状況が各自治体により異なる中、各学校が食育を推進するために活用できるよう、栄養教諭をはじめ、管理職、学級担任など全教職員を対象に作成されたものである。これからの学校の中で栄養教諭を中核にして食育を推進する際の一連の取り組みを「計画」「実践」「評価」「改善」のPDCAサイクルに基づき明確に示してある。そして、栄養教諭自身がこれからの学校において栄養教諭に求められる役割を自覚するとともに、管理職、学級担任をはじめとする全教職員が栄養教諭を中心とした食育推進体制について認識を深めることにより、それぞれの学校における食育をより推進させることを目的に作成したものであり、各学校や各教育委員会などにおいて、栄養教諭を中核とした食育の推進に関する理解促進に寄与することと、栄養教諭の職務である「食に関する指導」と「学校給食の管理」などの充実が図れることを期待している<sup>11)</sup>、としている。

栄養教諭の養成にあたっては、栄養教諭がその専門性を生かし、職務内容である「食に関する指導」と「学校給食の管理」において、PDCAサイクルに基づいた食育の推進を学校内で中核的立場として、それらの役割を果たせるような人材育成に努めることが必要と考える。

### 3. 栄養教諭の養成

平成17年4月1日からスタートした栄養教諭制度に伴い、文部科学省の栄養教諭養成機関として指定を受けた管理栄養士・栄養士養成施設において、栄養教諭免許に必要な単位を取得することで栄養教諭1種および2種の資格が得られるようになった<sup>12)</sup>。栄養教諭免許取得においては、管理栄養士・栄養士免許取得が基礎資格として必須であり、管理栄養士・栄養士としての知識や技術を修得した上で、さらに教職に関する知識や技術の修得を必要とする。学内においてこれらの知識や技術を修得した後に、学校現場を体験する「栄養教育実習」において研究授業などの実践を通して理論と実務を学ぶ。しかし、栄養教諭の免許取得に必要な「栄養教育実習」は1単位が1週間（5日間）と文部科学省で定められており、養護教諭など他の教員免許資格と比べると短い。

多職種との連携においても、学校における食に関する指導体制に、栄養教職員と家庭科教員、養護教諭の三者の連携が不可欠であるとの視座に立った、「養護教諭の食に関する指導に対する意識と実態調査」<sup>13)</sup>や、「養護教諭・栄養教諭養成教育における多職種連携を主眼とした演習プログラムの開発に関する研究」<sup>7)</sup>などの報告がある。一人職である栄養教諭や養護教諭においては自らが積極的に連携を進めていくことが望ましく、養成機関としては卒業後教育の現場で多職種と協力して任務を遂行できるよう、カリキュラムの中で

合同教育を実施していくことが必要と考える。

### 3. 1. 本学食物栄養学専攻 栄養教諭養成の実態

本学の食物栄養学専攻では、現在栄養士・栄養教諭の養成を行っているが、平成17年度入学生から栄養教諭の養成を行っている。図2のとおり、本学で栄養教諭免許を取得するのは毎年クラスの1割程度である（平成28・29年度は取得見込み者数）。

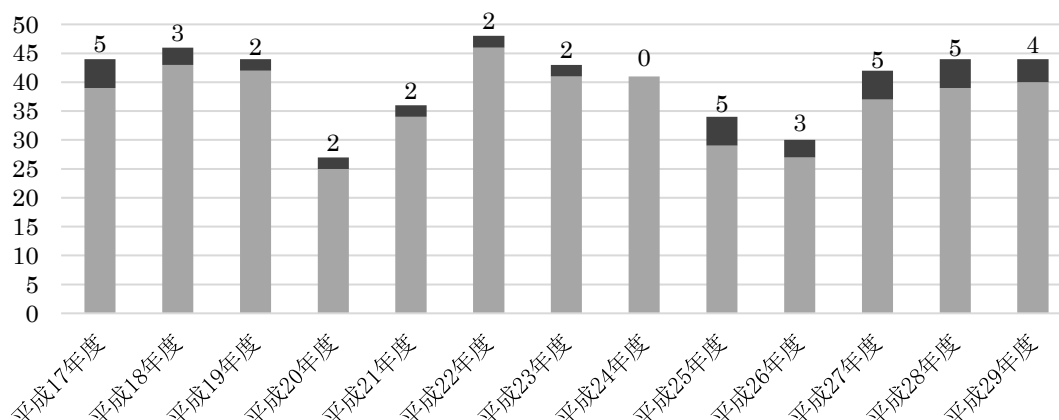


図2 入学生のうち、栄養教諭免許取得者数

栄養教育実習前後には学内で事前事後指導を行っており、これまでの実習校すべてにおいて、教育実習の約1ヶ月前に事前打ち合わせがあった。このとき学生は、研究授業でやりたいテーマ（題材）と学年の希望を伝え、あらかじめ作成した指導案を持参している。学生が持参した指導案を大方受け入れてもらえる実習校もあれば、全く別のテーマを指示されるところもあり、あるいは実習が始まってからテーマを伝えられることもあり、実習校や栄養教諭、指導教諭によって様々である。事前打ち合わせで学年とテーマが決まった学生については、学内の事前指導で指導案を検討し、教材研究、教材作成、模擬授業を行い準備を進める。

### 4. 調査目的

本学では栄養教育実習を終えた学生に事後指導の一環としてレポートを提出させている（表1）。後輩へアドバイスをを行うことを念頭に、栄養教育実習前の準備等で役に立ったこと、栄養教育実習中の経験から事前に身につけておくべき知識や技能など、それぞれの学生がそれぞれの目線でつぶっている。これを基にして、栄養教育実習を終えた2年生が栄養教諭を目指す1年生へ体験を発表する栄養教育実習報告会を設けている。

今回、このレポートから読み取れる学生の意識について把握し、特に教材研究についての課題を見つけ、今後の栄養教育実習前後の指導に活かすために調査を行い検討した。

表1 栄養教育実習後のレポート内容

栄養教育実習を終えて—後輩へのアドバイス—

- ①実習に望む態度について
- ②教材研究について（実習前の準備、実習中に受けた内容も含む）
- ③子どもたちに指導するときの注意点（研究授業も含む）
- ④学校現場の様子について
- ⑤児童の様子、児童との関わりについて
- ⑥その他感じたこと、反省点など

## 5. 調査方法

調査対象は、平成18年から平成29年の11年間に本学の「栄養教育実習」（2年次開講）を履修し、栄養教育実習を行った37名である（1名の科目等履修生を含む）。

調査項目は、表1に示したレポート内容の6項目のうち、②教材研究について（実習前の準備、実習中に受けた内容も含む）、である。

レポートは栄養教育実習直後に課し、1週間後に回収した。書かれた内容については個人が特定できないように配慮してまとめ、課題を検討した。

## 6. 結果

### 6.1. 教材の質と量

レポートには、自ら作成した教材の質や量、工夫についての記述が多かった（18人、48.6%）。教材作成に時間をかけた分印象が強いのであろう。

教材の質で意識している点は、誰が見ても解りやすい教材ということ、教材の大きさ、文字の大きさ、色の濃さ、線の太さ、自分でも面白い・楽しいと思えるもの、納得出来るものという意見が多かった。また、既製のイラストより自分で書いたものの方が児童に親しみがあって良いという意見もあった。教材を作成する数で意識している点は、1人に1つずつあたるようにや、各班分同じものがあたるようになどと配慮し、複数の教材作成に時間がかけられているのがうかがえた。

またワークシートについて、児童が名前を書くところに枠をつける、意見を書くところは広くし書きやすいように罫線を引くなど実習中に修正が加えられていた。学年により書く分量や字の大きさが異なるため罫線の幅も重要である。

イラストなど貼る教材にはラミネート加工を施すと強度が増し、繰り返しの使用にも耐えられるが、光が反射して児童が見づらいという欠点もあり、ラミネート加工をするかどうか悩んだ学生もいた。

## 6. 2. 児童の実態とテーマ・教材

単に教材を用意するのではなく、その指導に適した教材を考えなければならないという意見が12人(32.4%)からあった。その中には、児童の実態がわからないままテーマを決めて教材研究を行うので、担当の児童にそれが合うかどうか不安といった意見も多数みられた。担当のクラスや学年の実態をできるだけ早く知りたいと要望があるが、それは叶わないことであり、栄養教育実習中に指導案や教材を直す必要性を十分理解しているようだ。

アンケート結果を取り上げて研究授業を行うように指導案を立てていた学生は、アンケート結果の予想が当たったため指導案を変えずに授業を行うことができたが、もし違う結果が出たら指導案を変える必要があったと振り返っている。担当クラスの給食の残食写真や残食量の比較グラフなどを研究授業の中で示した学生は、児童に直接関係のある資料を使うことで効果が感じられたという。1つの指導案で同じ学年の複数のクラスで授業を行った学生は、クラスによって反応や意見が違ったと実感している。また別の学生は、野菜クイズに使用する野菜について、なぜその野菜を児童が学ばなければならないのかということを考え教材研究をしたという。

事前訪問の際、自分の関心のあるテーマをいくつか栄養教諭に示し、その中から児童の実態に沿う内容か、授業として成り立つか相談し、テーマを決めた学生もいる。また、授業のすすめ方は、担任の先生によって違うため、担任の先生にも指導案や児童の様子について意見をいただいた方が、より児童の実態に即した研究授業の内容になるという意見もあった。

## 6. 3. 黒板の使い方

板書については、学内での事前指導で行う模擬授業や栄養教育実習中の授業見学を参考にすると良いという意見が多く、また栄養教育実習中に教室を借りて、実際に黒板に字を書き、黒板に貼る教材の大きさや、文字・絵の見やすさを確認している学生が多かった(8人、21.6%)。黒板の使い方についても指導を受けて修正しておくことで、自分の頭の中に完成形が描け安心できるという。

黒板の大きさと模造紙に手書きした教材の大きさが合わず、再度同じものを作り直した学生は、栄養教育実習前に実習校の設備や環境を把握しておくのと良いと痛感している。また、自作の紙芝居中の赤・黄・緑の並び順と黒板に貼った並び順が違った学生は、児童に示す教材を統一するように指導を受けている。

さらに、学習済みの漢字は使うようにするため、漢字学習の進捗を確認しておく必要性を感じるとともに、黒板への筆記について、字の書き順を正しくし、児童の意見等をうまくまとめ素早く書くことなどを課題として挙げている。

## 6. 4. ICT（情報通信技術）の活用

ICT教育を積極的に行っている学校では、研究授業で電子黒板や書画カメラを使用した。学生は研究授業前に設備の使用方法和シミュレーションを行い授業に臨んでいる。これからはインターネット、パソコンやタブレットなど様々なICTを活用した授業が行われ、いつでも誰でも使いこなすことが求められるだろう。

## 7. 今後の養成施設における課題

栄養教諭は教育に関する資質と栄養に関する専門性を併せ持つ職員として、学校給食を生きた教材として活用した効果的な指導を行うことが期待されている。このため、食に関する指導と学校給食の管理を一体のものとしてその職務とすることが適当である、とされている。栄養教育実習ではこれら双方について理解でき、一体のものとして展開する利点と相乗効果が感じられるような内容を期待するが、これまでの11年間の教育実習実施記録（本学書式）によると、実習内容は“学校給食管理”については、近年は給食関連資料等の提示だけで済まされることが多く、“食に関する指導”に比重が大きくなっている。ただし、“食に関する指導”のなかでも、「児童・生徒への教科・特別活動等における教育指導」については直接実習を行うが、「児童・生徒への個別的な相談指導」、「食に関する指導の連携・調整」については実際に関われないことがほとんどである。また学生は、給食の時間の指導や、関連教科や特別活動の研究授業を行う際、学校給食を“生きた教材”として活用するように指導内容を検討するが、学校給食管理に携わることが少ないため理解に乏しく、給食内容と具体的な食に関する指導内容を関連付けることが十分にできていない。さらに、栄養教諭が他の関連教科を担当する先生と連携する実際に触れる機会がなく、連携の重要性を感じてはいるが、教科の教育法をどう食に関する授業に活かすのか、それに適する教材は何かを理解できないでいる。

学生の意見から、自ら作成した教材の質や量・工夫、黒板の使い方について意識が強いことがわかったが、児童の実態に合わせたテーマを選択し、教材を選定することができているのかについて疑問に思う学生は一部に留まっている。指導内容の選択とともに、教材研究をしっかり行い、児童が意欲的に取り組める授業を展開する力量や板書など基本的な授業技術を身につけていかなければならない。

栄養教育実習期間が5日間というのは、他の教職免許取得のための実習期間と比べて短い。実習開始後にテーマが確定した学生からは、教材研究不足が研究授業で顕著に表れてしまったと意見があった。また、5分間の給食指導においても事前に準備ができていないと大変だという。栄養教育実習中は、授業参観や給食指導、指導案検討など組み込まれており、実習校にいる間に自らの作業や教材研究を行う時間的な余裕はないと思われる。また、知識や技量が十分でなく、精神的にも余裕のない学生にとって、事前にテーマが示されず、的を絞ってしっかりと準備ができないというのは自信のなさに直結し、その弱みが



実習中に表れてしまうのだろう。

三重県は「三重県教育ビジョン～子どもたちの希望と未来のために～」で三重の教育のめざす姿を示し、その実現に向けて平成28年度から平成31年度までの取組内容および目標値を設定している。その中に情報教育の推進とICTの活用についても記述がある。ICTを活用したわかりやすい授業を推進するため、コンピュータ教室やタブレットパソコンを活用するために必要となる校内環境を整備し、教員の授業力向上を図る研修の実施、効果的な教材や指導方法等について研究を進めている。具体的な目標値として、「ICTを活用して指導することができる教員の割合」を82.2%（平成26年度）から85.0%（平成30年度）に上げるとし、「ICT活用指導力の向上に関する研修を受講した教員の割合」を29.3%（平成26年度）から42.0%（平成30年度）に上げるとしている。

食育教材においてもソフトが開発されており、栄養教諭もICT教材の活用ができることが望ましい。栄養教育実習前に学内でICT教材を使用した授業検討および教材研究をする必要があると感じられた。

## 8. まとめ

栄養教育実習を不安と感じる学生がほとんどで、その理由は栄養教育実習自体が未知であり、授業ができる自信がなく、指導案や教材の質的保証がされないからである。自分がどのような食育をしたいのかを明確にし、栄養教諭・担任と共通認識を持って児童への指導にあたることが大切である。そのために、児童の実態把握に努め、一つのテーマについてパターンを変えた授業内容を考えたり教材研究を幅広く行うなど準備をしっかりとさせたい。また、事前の実習校との打ち合わせを充実させ、実習内容について栄養教諭の職務の実際に触れる機会を多く設定してもらうように依頼していきたい。1週間という実習期間は短いですが、学校における食に関する指導を学校給食と一体のものとして展開する意義を理解できるような栄養教育実習にしてほしいと願う。栄養教育実習を充実させるためにも、学生の質的・物的および精神的な事前準備が必要であり、十分に時間をかけて指導していきたい。

また、実習終了後は「教職実践演習（栄養）」を活用し、学生自身が自分に不足している課題について取り組み、それぞれがなりたい栄養教諭像に近づけるように研究を重ねていくように指導したい。

担当教員は、学生が意欲を高め、自らが資質向上に向けて努力をするよう指導が必要であり、実習校や栄養教諭との良好な関係作りに取り組んでいきたい。養成機関としては学生が目標とする栄養教諭免許取得に向けて、カリキュラムの充実をはかることや教育アシスタントやボランティアへ参加できる機会を提供することが重要と考える。

## 引用文献

- 1) 大森玲子 (2008) : 学校における食育の推進と栄養教諭の役割, 宇都宮大学教育学部紀要, 第1部, 58, 227-237.
- 2) 影山弘典 (2014) : 学校における食育の推進を担う栄養教諭の役割と養成, 仏教大学教育学部学会紀要, 13, 105-122.
- 3) 藤澤良知, 芦川修貳, 古畑公 (2009) : よくわかる栄養教諭－食育の基礎知識－, 同文書院, 1-19.
- 4) 嶋田さおり (2015) : 栄養教諭を中心とした学校における食育システムの研究, 愛媛大学学位論文, 1-10.
- 5) 有吉英樹 (2012) : 実践的指導力育成の試み－私立短期大学栄養教諭養成の事例を中心に－, 東九州短期大学紀要, 14, 1-12.
- 6) 長幡友実, 松田充代, 伊能由美子他 (2010) : 栄養教諭免許保持者の特徴と栄養教育実習の受け入れに関する課題－栄養教諭免許非保持者との比較－, 栄養学雑誌, 68(3), 208-212.
- 7) 水津久美子, 丹佳子 (2017) : 養護教諭・栄養教諭養成教育における多職種連携を主眼とした演習プログラムの開発に関する研究, 山口県立大学学術情報, 10, 103-113.
- 8) 守藤明日美 (2017) : 現在の鈴鹿市の栄養教諭の現状と今後の課題, 鈴鹿大学短期大学部食物栄養学専攻卒業論文集, 151-160.
- 9) 文部科学省 スポーツ・青少年局 学校健康教育課 (2007) : 栄養教諭の配置状況と配置促進について, 季刊栄養教諭 夏第8号 24-25.
- 10) 川越有見子 (2008) : 栄養教諭の職務実態に関する考察－福井県、京都市、札幌市、南州市の実態調査を通して－, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 57, 211-240.
- 11) 文部科学省 (2017) : 栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育.
- 12) 池田小夜子, 斎藤トシ子, 川野因 (2015) : サクセス管理栄養士講座, 栄養教育論, 116-129.
- 13) 鈴木洋子 (2011) : 小学校及び中学校における食育推進の課題の究明, 奈良教育大学紀要, 60, 107-112.

## 参考文献

- ・荒木裕子, 谷口真理子, 細井陽子 (2014) : 「栄養教育実習」の実施状況と課題, 九州女子大学紀要, 51, 149-156.
- ・上田秀樹, 山本早紀子, 西條千知ほか (2009) : 栄養教諭制度における栄養教育実習の現状と課題, 大阪樟蔭女子大学論集, 46, 63-76.
- ・大富あき子 (2016) : 栄養教育実習の経験による学生の栄養教諭に対する意識の変化, 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 46, 57-73.

- ・ 金田雅代 (2017) : 三訂栄養教諭論－理論と実際－第3版, 建帛社, 13.
- ・ 山岸博美 (2014) : 短期大学生における栄養教諭に関する意識調査, 富山短期大学紀要, 49, 1-7.
- ・ 三重県 (2016) : 三重県教育ビジョン,  
<http://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000627286.pdf> (最終アクセス 2017年11月1日)
- ・ 文部科学省健康教育・食育課 (2015) : 栄養教諭の配置状況 (平成17年度～平成27年度),  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/syokuiku/\\_\\_\\_icsFiles/afielddfile/2017/03/27/1257966\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/___icsFiles/afielddfile/2017/03/27/1257966_1.pdf) (最終アクセス 2017年9月30日) .

### 筆頭執筆者の所属と連絡先

乾 陽子 所属 : 鈴鹿大学短期大学部      Email: [inuiy@suzuka-jc.ac.jp](mailto:inuiy@suzuka-jc.ac.jp)

## **Attitude Survey for Students Studying Nutrition and Participating in Student Teaching**

**Yoko INUI, Mineko FUKUNAGA , Satsuki KUBO**

Key Words: diet and nutrition teacher, teaching practice, consciousness of the student, guidance on food, teaching materials